

## ▶ 享年67歳 早すぎる死

ローマから中近東、アジアを旅して1969年4月初め、東京に戻った私は伊東三郎の死を知りました。年譜を見れば、「1969年(昭和44年)67歳1月、健康を害して病臥中、身近に東大闘争起り、事態の重大さを深刻に考える。2月28日発病、氷川下セツルメント病院に入院、3月7日午後10時20分死去。9日、本郷の自宅にて葬送」と記されています。

68年の夏、新潟港から船でナホトカに行き、ヨーロッパに旅立った私でしたが、上野駅のホームまで見送ってくれた伊東でした。その時は、東大闘争や、ましてや日大闘争があのように大きく盛り上がることなど予想もしませんでした。

享年67歳とあります。当時20代半ばの私から見ると、伊東はもっと老成しているような感じでした。しかし今思うと、67歳というのは若すぎるように思います。まだまだ生きていてもおかしくない年齢です。

伊東の愛弟子である阿部祈美は、帰国後すぐに海外での話を聞きたいというのでお会いしました。その折り、私は伊東の死を知ったのでしょうが、その時の記憶はありません。しかし、翌年か二年後だったかに行われた追悼会については鮮明に記憶しています。伊東のかつての農民運動の同志から戦後生まれの学生たちまで、大勢集まりました。

埴谷雄高が伊東を偲び、今手元にある『遺稿と追憶』を発行する意思を込めて「運動の全史をつくろう」と呼びかけた様子が今でも思い起こされます。伊東を偲ぶ静かな思いの中にも人々の熱が籠った会合でした。

この『高たかく遠くの方へ 遺稿と追憶』(渋谷定輔、埴谷雄高、守屋典郎編 土筆社 1974)という遺稿集も実は友人でアナキズム研究者でもある手塚登士雄から借り受けたものです。度重なる引っ越しや

改築などで、この本もすでに私の手元を離れていて、彼からこの本を借りてこの拙文を書いています。

ちょうど600頁になるこの大著には、伊東のエスペラント原作詩や小論や手紙、友人知人の伊東を思う手記などがまだまだたくさん収録されています。

## ▶ 「馬鹿いっちゃいかん！」

1960年、反安保闘争が高揚し大きな大衆運動として盛り上がりました。全学連主流派を中心とする学生運動の渦の中に清水孝一はいました。1957年の高校2年生の時、伊東の『ザメンホフ』を読み、それ以降、エスペラント運動に入っていた彼は5月20日、岸信介率いる自民党の強行採決に抗議するデモ隊に入り、「首相官邸突入隊にまきこまれて、ヘイを乗り越えて中へ入ってしまった」と『遺稿集』で記しています。以下、清水の「今も私の心に生き続ける伊東先生」を文章に沿いながら伊東を偲びましょう。

清水は、半分気絶状態のまま、やっと逃げ出し、ある診療所のベッドに横たわっていました。その日の午後、約束の場所に現れない清水を心配した伊東はやっとのことで清水がいる場所を見つけました。以下、長くなりますが、清水の文章を紹介します。

——「先ほど、院長先生に会ったが、君は、バラ銭以外何も持っていなかったというが、まさか、意図的に、死を辞さないというような気で、突入したんではないのだろうね」

と、例の一語々々かみしめるような調子で、先生はゆっくりしゃべる。私はしばらくためらったのち、「はじめは、そんな気ではなかったんです。でも、もしかしたら、つかまるかもしれないという、懸念もあったから、定期や学生証などは、出るとき家に置いてきました。警官隊と

第十八回 多くの人たちに慕われた伊東三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

やりあっているうちに、もう死んでもいい、と思うようになってたんです。その結果として、“機動隊、権力が、いかに残虐、非道であるか”が、国民大衆にはっきりわかってもらえるなら・・・と、無我夢中で・・・」といいかけた、その時、

「馬鹿いっちゃいかん！」

先生の口から、大声が発せられたのです。すでに、面会時間を過ぎ、周囲は、消灯して、静かになっていたので、その声は、共同部屋いっばいに、ビリビリと響き、あちこちで、スタンドの灯がついた。

「すまん、病院で大声なんか出して」——



それは清水が伊東との10年という付き合いの中で初めて見た、伊東の怒りの顔でした。

### ➤ 自己変革し続けた人格者

清水はその後、大手出版社の社員として編集者人生を送りました。その出版社が出す週刊誌の取材記者をしていた私はそこで清水と出会いました。私がエスペラントを齧っていると仲間から聞きつけた清水が私に電話をしてくれました。当時、清水は女性週刊誌の編集者でした。

その後、週刊誌記者を辞めた私は清水との交流も途絶えました。しかしエスペラントを再開してから清水との付き合いも復活しました。『遺稿集』で清水はこうも書いています。



——「清水君、いつまでも乳飲み児の気持ちでいちゃ、いかんよ」

という、先生のことばは、あれだけの活動をしてき、また、あれだけの齢でありながら、いつも、自己変革をし続ける全人格者のものとして、私にとって、父母はもちろんのこと、いかなる大学者、哲人のそれよりも、重く意味あるものとして、心の底深く沈殿している」——



私は伊東とは1年にも満たない、短い付き合いだったので、伊東への思いをこのように回想できる清

水は幸せ者だと思います。

### ➤ 「ウォーッ！」と奇声を発す

坂井松太郎というエスペランティストがいました。彼が遺稿集で伊東のことを「最後のエスペランティスト」と題して思い出を書いています。

それを読むと、1930年代の初めの頃、「伊東三郎は蔵原惟人と並んでプロレタリア文化運動の神様のような存在であった」と記しています。そしてまた、伊東が住んでいた玉川沿線の借家に訪ねたら、長谷川テルと劉仁がいた、とも書いています。しかし、坂井は「またどういうわけか、なんでもよく喋る伊東三郎だが、長谷川テルのこととなると、あまり話したことがない。それも勘繰れば気になることだが、今はすべて過去のこととして葬りさるより仕方がない」

ある人を偲ぶ10人ほどの集まりの中、私は坂井と隣り合わせになって言葉を交わしたことがあります。坂井は「エスペラントが、真に革命的な精神と、真に国際主義の精神を担いうるものとするならば、エスペラントを学びうるし、また学ばなければならぬ」という毛沢東を支持する人でもありました。当然にも当時の日本のエスペラント界の大勢には批判的だったと思います。そして私に、やんわりと伊東の著書『エスペラント』を観念論だと批判しました。

その坂井が遺稿集で伊東の面白いエピソードを紹介しています。

忘年会か新年会の酒席で伊東にも歌ってくれという声があがった時、伊東は「では、もっとも古い歌をうたおう」と座りなおし、ひとつ大きく息を吸いこんで「ウォーッ！」と奇声を発したので、みんな啞然としてしまった。伊東は「これは原始時代に、原始林のなかでわれわれの祖先が歌った歌だ」といったのでした。

戦前、獄中にいた時、ひどい拷問を受けた伊東は、音をあげるのは癪だし、黙ってじっと耐えているのはなかなか苦しい。そこで伊東は、「ウォーッ！」と叫んで、警察テロに対抗したというのだ、と坂井は記しています。

伊東三郎の面目躍如、と言ったところでしょうか。